

令和元年5月15日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13168

研究課題名（和文）絵絹の絹目と絵画の時代様式

研究課題名（英文）A Study of Silk Weave and Period Styles in Japanese Painting

研究代表者

泉 武夫（IZUMI, TAKEO）

東北大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：40168274

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：古代・中世仏画の基底材をなす絵絹については、時間軸による変化がある。その具体的な変化の様相について調査研究を進め、絵画様式の変化とどのように対応するかについて、研究の視点を整理することを目指した。その結果、絵絹の絹目は大きな時間の流れの中で、次第に密から疎に傾く状況を確認することができた。様式史的特色と合わせて考察すれば、作品の制作年代判断にも有効であると結論づけることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のテーマはまだこれまで試みられたことがない絵画の基底材の通史的研究である。美術作品の特質は、表現の特色が上層をなし、素材の特色が下層をなしている。その素材の根幹ともいえる絹地の時代的変化の概要が明らかにできれば、作品の位置付けがさらに深められる。美術史の研究のはばを広げる意味でも、今後その意義が認識されるであろう。また文化的遺産への素材論への取り組みを鼓舞することになると考える。

研究成果の概要（英文）：The quality of the silk weave as a material used for the Japanese Buddhist paintings in the era from 9th century till 14th century had changed according to the time passing. This study can provide the view point to research about the relations between the changing phenomena of silk weave and that of period styles. It would be also effective to analyze the painting method about using the silk material and decide the generation of the objects.

研究分野：日本仏教絵画史

キーワード：美術史 仏教絵画 素材論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の古代・中世絵画史研究において、その中心的素材となる絵絹の重要性については、従来から関心が払われている。平安時代仏画の絵絹は「密」で、鎌倉・南北朝時代仏画へと時代が下降するに随い、次第に「粗」になってゆく、という漠然とした共通認識がすでにある。しかし、絵画の時代様式と絵絹がどのように連携しているのか、という課題について正面から論じた具体的な研究はないままであった。

2. 研究の目的

本研究は、平安時代から南北朝時代における仏画を中心とした絵画作品の絵絹の組織の粗密、縦糸(経)と横糸(緯)の太さやバランスなどに注目し、9世紀から14世紀までの諸作品を対象として、組織の変遷の諸様相を分析し、絵画の制作年代とどのような関係にあるのかを明らかにしようとするのが目的である。絵絹の変遷の明確化が、絵画の制作年代論を補強することになるのを意図するものである。

3. 研究の方法

(1)本研究は、A 作品の実見調査、B 既存スライドのデジタル・データ化、C データ分析と総合からなる。A の実見調査については、実際に作品を調査し、絹目を画像として記録した。デジタル方式での一定の拡大率を確保しながらの画像取得システムが現時点では未完成なため、フィルムカメラ OM4 とエクステンション・チューブによるスライド撮影を中心に調査を遂行した。この方式は 35mm のフィルム膜面に、1cm 相当の画像が定着する点できわめて実践的である。しかも、リング・ストロボの光量コントロールの精度が高いため、現時点では最良の絹目画像が得られる。また、補絹箇所を容易に判別できる赤外デジタル撮影を適宜併用した。実見作品については調書を作成し、様式史の見地からの制作年代判断も同時に並行して行った。(2) B については、これまで調査した平安時代の仏画の絹目のスライドを、1 カット 5M ほどのデジタル・データに変換した。かなりの作例の絹目スライドがすでに手元にあり、また一作品について複数の接写箇所を撮影しているの、それなりの成果に結びついたと考える。(3) C については、取得した絹目画像の経緯の数値化を測りながら、各時代の基準作と周辺作品を適度な時期にグループ分けしながら、時間軸に即した変化の有無と、様式史的判断からの制作年代の推定結果を有機的に連結し、その関係性を導き出すことを試みた。

4. 研究成果

(1) 平安時代の絵絹について：9世紀から12世紀という大きなスパンで眺めれば、絵絹の組織はゆるやかではあるが明らかに変化があるように見える。それは常に一定の方向に向かって絶えざる変化をするということではなく、行きつ戻りつする場合もあるが、全体として眺めれば大きな潮流をもっているように見受けられる。その変化の相は、様式史的特色と兼ね合わせてみると、さらに有意義になると考える。

絵絹の組織の特色を判断する際に有効な指標は、以下の三つの項目にまとめることができる。

- (一) 糸の均質性 経緯それぞれに、質と太さが揃っているかどうか
- (二) 織の整合性 経緯のそれぞれの間隔が均等かどうか
- (三) 組織の稠密性 疎密の程度

これとは別に糸の太さ、および堅牢感なども参考指標となるように思われる。(一)(二)がともに程度が高い場合、「斉一性」がある、ないし高まると表現するのが適当である。

平安時代前半のうち、9世紀の遺品はサンプル画像が東寺本「真言七祖像」のうちの二祖像と西大寺本「十二天像」の2幅のみなので確かなことはいえないが、この平安時代前半の絹は予想に反して質がよく、見方によっては平安時代後半第一区分期の作例に優る。もちろん斉一性の点ではまだ未成熟であるが、平安前期にある程度の織りの技術が達成されていたように思える。それが平安時代半ばの10世紀になると、有志八幡講十八箇院蔵「五大力菩薩像」で観察する限り組織のムラが大きくなり、特色をつかみにくい様相を呈する。一般的理解ではこの時期は様式史的には過渡期に当たるのだが、まるで絹目までそれを反映するかのようだ。

平安時代後半は11世紀から12世紀前半までの第一区分期と、12世紀半ばから後半にかけての第二区分期に分けることができる。仏画研究者の間ではもっとも上質な絵絹の時期と理解されている。日本的仏画様式の成立・完成期に当たり、素材の面からも符合するとみなされている。ただ、様式史上から平安仏画の最盛期に想定されている11世紀は、絵絹の発展史の途上にあり、日本仏画の様式史上の熟覧期といえる12世紀前半から半ばが絵絹の最上期に相当するようだ。金剛峯寺本「仏涅槃図 応徳涅槃図」、京都国立博物館本「釈迦金棺出現図」、来振寺本「五大尊像」などの11世紀後半の諸作品から、浄厳院本「阿弥陀聖衆来迎図」、竜光院本「伝船中湧現観音像」、京都国立博物館本「十二天像」・東寺本「五大尊像」など12世紀前半の諸作品に至る絹目を概観すると、糸の均質性と織りの整合性がゆっくりではあるが進歩してゆき、平安時代後期第一区分の最後の神護寺本「釈迦如来像 赤釈迦」でそれが頂点に達するように見受けられるのである。第一区分最後から第二区分にかかる頃に「赤釈迦タイプ」と名づけた良質の絵絹が複数確認できるのも、この時期ならではの特色だろう。そして、平安時代後期第二区分の12世紀半ばから後半にかけての諸作例では、織りムラがまったく解消されるわけではないものの、それ以前の作例の絹目に比較すれば三つの項目の平均点が確実に優

ってゆくと観察される。ただ、稠密性という点では12世紀後半にかかると、漸近線のように次第に疎に傾いて来つつあるかに見えるのは、次の鎌倉時代の様相とも合わせて考えなければならぬ点である。

(2) 鎌倉時代の絵絹について：13世紀から14世紀前半にかけての時期は、平安時代後期に達成された絵絹の組織が、次第に稠密性の点で減衰する傾向を示す。その様相はなお整理途上で、現時点で確定的なことはいえないが、13世紀の第三四半期ころまでと、第四四半期から鎌倉時代末期までがひとつの画期をなすようである。前半から半ばにかけては、概して組織が粗くなる傾向をみせるが、なかには12世紀の絵絹に匹敵する密度の絵絹も散見される。宝山寺本「弥勒菩薩像」や北野神社本「舞楽図衝立」などはその一例とみなされる。いっぽうこの時期の代表例とされる禅林寺本「山越阿弥陀図」は、様式史的には秀逸な作風でありながら、絵絹組織はかなり粗いものとなり、時間軸に即した変化の図式が確認できる。第三四半期と第四四半期の狭間にある聖衆来迎寺本「六道絵」15幅は同質の絵絹組織で、南市町本「春日宮曼荼羅」とならんでこの時期の典型的な例を提供していると考えられる。斉一性はありながら、平安時代後期と比較すれば、やはり質の低下はまぬがれない。

次の13世紀第四四半期から鎌倉時代末期までの時期は、この傾向を受け継ぐ例を多数認めることができる。その一方、通常の絵絹のはばではなく、大画面を一枚の絵絹でまかなう広絹使用を初めて確認できることは重要な点である。14世紀初期の禅林寺本「当麻曼荼羅図」および知恩院本「阿弥陀二十五菩薩来迎図 早来迎」がそれであり、どちらも細い経と極端に太い緯、それに経緯の間隔が大きいという特色ある組織である。この種の広絹はもう少し早くから用いられていたかもしれないが、現状ではこの時期以前に遡る例は見当たらない。しかも、しばしば当麻曼荼羅という浄土への救済を求める画題の作例に多いことは、きわめて重要な点である。

(3) 南北朝時代の絵絹について：この時期は短期間ではあるが、絵絹組織の疎らになる度合いが相当顕著である。やはり社会構造の不安定さと権力の分立事情が、絹生産の現場にも影響を与えていると考えられる。仏画や肖像画の枠を超えて、絵絹は経が細く緯が太いという傾向がより強まるのは、贅文によって比較的制作年代が見当付けやすい頂相などの例をみてもわかる。とりわけ制作時期や像主をめぐる論争が続いている神護寺本「伝源頼朝像・平重盛像」いわゆる 神護寺三像 の絵絹は、まぎれもなくこの例に属するものであり、制作年代として14世紀南北朝時代という位置付けは否定できないように思われる。

南北朝時代の後半から末頃には、天皇の玉体護持の儀礼(三壇御修法)に用いられる本尊画像の新写をめぐる種々の不手際が出来している様子を史料から確認することができる。そのひとつが絵絹問題で、この儀礼用に調達された絵絹は質が悪いため、再調達を余儀なくされた事件があった。その結果最終的に朝廷からその仕上げぶりが了承された「普賢延命像」は、醍醐寺に現存することが判明している。この仏画の絵絹はそれ以前のものと比較しても粗悪な印象で、やはり南北朝時代は絵絹においては衰退への過渡期といわざるをえない。ちなみに、この後の室町時代がもっとも疎らな絵絹を用い続けた時代なのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

泉武夫、絹のみほとけ、奈良国立博物館夏期講座、2018年8月23日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。